



つなぐ 農地に花

農地を生かし 花農家として一步一步

花井由貴さん(大久保・外内)



花農家として独り立ちして3年目。「しえるふぁーむ」の代表として、カスミソウやストックの生産に取り組んでいます。ストックは、今年1月、新成人に贈る花束にも使われました。夫の実家の農地を生かし、4棟のハウスでカスミソウを栽培。この夏は露地でヒマワリの契約栽培にも挑戦しましたが、台風の影響で思った本数が出せませんでした。「カスミソウも今年は非常に生育がよくて楽しみにしていたのですが、天候の影響で一気に咲いてしまい、出荷が追いつきませんでした。可能な限りは出荷しましたが、もっと市場に出せたのにと悔しい思いをしました。次こそはきつと!」。

カスミソウは切り戻して、秋に再び出荷の時期を迎えます。そんな中、由貴さんは夫の準一郎さんと2人で、新たなハウスを建てています。「節約しようと、材料を購入し、自分達で建てています。強風をしのげるよう太いパイプも使いながら」。3人の子育てをし、花を出荷しながら、ハウスを建てるバイタリティ。PTA活動や村の事業への協力も惜しみません。共に歩んでくれる準一郎さん、できることを手伝おうとする子ども達の存在が、由貴さんを支えています。様子を見に来る花農家の先輩達や、おかずを差し入れてくれる近所の皆さんも、心強いサポーターです。

「しえる」はフランス語で「空」の意味。手作りの看板は由貴さんの実父からの誕生日プレゼント。「871」は「はない(花井)」、かわいらしい5匹のリスは花井さん家族を表しています。



「(いい牛に育つのは)愛情のかけ方なんです」と豊洋さん。クツワ掛の農場の牛達は人懐こく穏やかに暮らしていました。「自己満足かも知れないですが、やっぱりいい牛を育てたい」。



つなぐ 牛飼いの技

愛情をかけて いい牛を育てたい

佐藤豊洋さん(飯樋町)



「母はそろそろ引退してゆつくりするのでもいいなあと言うけれど、父は繁殖農家をやる気ないです」と笑う豊洋さん。豊洋さんも50頭ほどの親牛を自分の牛として飼育、繁殖農家として独立していて、父隆男さんの牛の出産なども手伝っています。「(牛の飼育は)常に勉強をしながらやっています。多少の失敗はあったとしても、時代に合わせた進化も大切に考えてやっていきたい」。市場のデータも検証し、購入者が求める牛の傾向などにも注目。血統のよい牛の受精卵を使い、価格を抑えながらいい牛を生産する試みなど、実験的な取り組みも行っ

ています。豊洋さんは、牛農家としてさまざまな考えをめぐらせ、自分が育てる牛のこととはもちろん、生産に関わる人や業界全体にも熱い思いを持っています。「ここまで大きくしてきた親父には先見の明がありました」と語る豊洋さんにも、そのまなざしが既に備わっています。